

[巻頭言]

「大学改革と学生教育」

東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科作業療法学専攻
大黒 一司

大学改革、学士課程教育の質的転換、入試制度改革など大学の「改革」に関することばを聞く機会が多い。FD、GPA、シラバス、キャップ制、ラーニング・コモンズなど大学の教員歴が浅い先生には耳慣れないことばも多い。しかしここ数年来、否応なしに大学は改革を進めることと、大学における教育研究の質の保証や向上のための取り組み、財務状況を広く公表し、情報発信することを求められている。全入時代と言われて久しいが、大学が学生を受け入れ教育し、社会に貢献する人材を輩出し続けるには、大学が改革計画を実行するだけでなく、教育する側の教員、職員の意識も変化させていくことが必要であろう。国が大学に対していろいろな改革を求めているが、大学自らが時代に即応し建学の精神・理念に基づき学生を受け入れ、教育していくことが本来の姿のように思える。特に本学科のようにリハビリテーション専門職を養成する課程においては、大学教育と専門職として求められる質を高める教育の両輪を行うことが大切であることは言うまでもない。そのことを実行することは当たり前のことのように思えるが、簡単ではないことを多くの教員が感じていると思う。

教員の立場からすれば、入学した全ての学生が卒業するときに「勉強することは大変だったけど楽しかった」「自分の目指す職業のことを好きになった」と感じてくれたら本望である。しかし、なかなかそのようにはならないことを、教員は実感しながら教育しているのが現実であろう。全ての学生が自主的に学び、知的好奇心をもち自らの学習意欲を高めしてくれるのであれば何の問題もないであろう。大学入学が決まった後、早期から（正確には入学前の高校在学中）多くの大学では入学前教育としていろいろな試みを行っていることは周知の事実である。入学前教育に取り組む大学は、2008年は327大学であったが、2012年には517大学に増加している。私立大学の約9割、国立大学の6割以上が実施しているとの報告がある（2012年4月、読売新聞社、教育ルネサンスより）。多くの大学が入学前からいろいろな工夫をして学生の学力向上、学習意欲を高めることに努めているが、「意欲に欠ける学生の増加」「集中力に乏しい学生の拡大」など、指導の難しさも指摘されている（2012年、山地、橋本）。「よく手を挙げる学生」「何度も質問する学生」が学習に対する行動特性から意欲的に見えるが、学習意欲は積極的な学習行動だけに見られるだけではない。授業では積極的な学習行動には見えないが、試験結果から勉強不足を自覚し学ぼうとする動機をもつなど、一見消極的に見える学習行動に存在している学習意欲が指導を難しくしているようだ。

本紀要に入学前教育、初年次教育に関して3編の論文が掲載されている。何れの試みも成果が見て取れる。教育の成果は即効性の部分と時間が経過してからわかる部分もあるだろう。対象となった学生たちが卒業する頃、そして卒業後の成長が楽しみである。その一方で教員の授業が、学生に納得感を感じてもらえるよう創造することを自分への戒めとしたい。